

『静かなる情熱 愛しかいらねえよ。番外編』

著：ふゆの仁子

ill：タカツキノボル

「それでも信頼できる関係って素晴らしいですね」

「——信頼？」

澤は強く頷く。

「興隆会では絶対に話せないと前置きされてから、教えてくれました。様々なことがあったらうに、お父さんと同じ弁護士の道を目指し、実際にそのあとを継いでいる近江さんはすごいと思っらっしやるそうです。そんな近江さんだから、俺の気持ちがい誰よりもわかってくれるはずだともおっしゃっていました」

瞬間、どんな顔をしたらいいのかわからなかった。動揺しつつ灰の長くなった煙草を灰皿に押しつけ、口元に手をやった。

そのとき、部屋の扉がノックされる。

「どうぞ」

声だけで応じながら、近江は振り返れないでいた。

「岩槻さんが見えです」

その名前に全身が強張る。

「岩槻さん！」

嬉しそうに反応する澤がその場に立ち上がったあとで、近江の全神経が背中に集中した。

自分の背中に、岩槻がいる。部屋に流れ込んでくる香りと気配に、鼓動が高鳴ってくる。

「忙しいところ、澤さんのために時間を割(さ)いてもらったようで申し訳ない」

淡々と紡がれる言葉に、近江はやっとのことで我を取り戻して振り返る。

つい先日会ったばかりの男の顔が、既に懐かしく思える。

「——興隆会次期後継者の情人と右腕が揃って久方組の顧問弁護士のところにいると知れたら、大騒ぎになるな」

嬉しさゆえに緩みそうになる頬を堪え、わざと捻(ひね)くれた言葉を口にする。

「心配することはない。数か月もすれば、興隆会と久方の正式な提携のニュースが広まり、誰もが事態を把握する」

「だったら、いいんだけどね」

曖(あい)昧(まい)な対応をすると、岩槻の眉が上がる。

「何かあるのか」

近江の僅かな口調の変化も、決してそのままにはしない。あらゆる場所に敏感なアンテナを立てている岩槻だが、さすがに近江の心の機(き)微(び)までは気づいていない。

恋愛関連に鈍感なところがあるのだろう。もちろん、卯月の世話係であり、今が一番大切なときでもある。だからといって、この年になるまで独身を貫き、浮いた噂のひとつもないのはどうかと思う。

近江を相手にした過去はあっても、岩槻はゲイではない。

卯月のお披露目が済むまではという思いもあっただろう。しかしその大きな節目を迎えた今、おそらくあまり遠くない将来、今度は卯月でなく岩槻の見合い話が舞い込むだろう。生真面目な岩槻は、組のためだと言われれば、間違いなく従ってしまうだろう。「別に、何も。それより、澤さんを迎えに来たんだらう？ とつとと帰……」

「俺は一人で帰れます」

二人のやり取りをじっと黙って聞いていた澤が、突然に割って入ってくる。

「お二人とも、こうして公の場以外で会われるの、久しぶりなんですよ？ だったら時間の許す限り、たっぷり話してください」

「え」

澤の突然の発言に、ついていけない。

本を入れた紙袋だけ、岩槻の前に置く。

「すみません。重たいので、これだけお願いします。近江さん、お話を聞かせてくれてありがとうございました。とても参考になりました」

ぺこりと頭を下げると、逃げるようにして応接室を飛び出す。そしてスタッフに会うと、彼女たちにも挨拶をしてから、事務所を出て行ったらしい。

時間にして、一瞬。

驚くほど素早く迅(じん)速(そく)な動きに、近江は当然のことながら、岩槻も反応できなかった。呆(あつ)気(け)に取られていたというのが正しい。

ボタンと音を立てて外の扉が閉まったのを把握してから、近江は岩槻と見詰め合う。それからどちらからともなく、ぷっと吹き出した。

「なんだ、今のは」

あまりのおかしさに、近江は腹を抱えながらソファに腰を下ろす。

「私に聞かないでくれ」

岩槻もまた壁に手を突いて笑う。

「澤さんの行動パターンは、私には理解できない」

「だろうな」

ひとしきり笑ってから、近江は岩槻に同意する。考え方は理解できても行動パターンは理解できない。卯月にはわかるのだろうか。

「つい先日、二人の時間を過ごしたばかりだが、せっかく澤さんが設けてくれた同窓会の場だ。一服していかないか？」

額に下りた前髪をかき上げながら、ようやく笑いの収まっただろう岩槻を誘う。と、怪訝な視線を向けられる。

「心配しなくても、この場で襲ったりしない」

「そんなことを心配しているわけではない」

岩槻は憚(ぶ)然(ぜん)と言い放つと、己の言葉を証明するかのようになり、つい今しがたまで澤の座っていたソファに腰を下ろす。そして煙草を取り出そうとする仕草を目にして、近江がタイミングよくライターの火を向けた。

「ホストみたいな真似はやめろ」

しかし岩槻は己で火を点ける。

「ノリ、悪いなあ」

行き場を失ったライターの火を、仕方がないので自分の煙草に点けた。銜え煙草の

まま煙を吹き出して、肩を竦めた。
「さて、なんの話でしょうか」

本文 p146～151 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>